童

2010.4、28

　可愛い林檎の葉が芽を出し、桜やスイセンが咲き、鯉のぼりが春風に泳ぐ大地の丘。ここに佇むだけでほっとするぽかぽか陽気がようやく訪れました。大地の煙突から連日白い煙がのぼっていましたが、ここ数日はその姿が消えました。
　ぽかぽか陽気と同時に、子ども達の足取りや動きも、躍動感溢れる軽やかでリズミカルになったような気がします。花壇の前の木道を何度も走ったり、裸足になって鯉のぼりと戯れたり、泥場で遊んだりする姿が、多く見られます。まさに、土、泥、風、草、水等と一体となって遊ぶ姿は、やはり、子供は自然の一員であることを証明してくれています。
　もちろん、そんな子ども達と共にする、スタッフも軽やかに陽気に連日楽しんでおり、大地全てが、春満開という季節を迎えております。
　この童は、徒然なるままに青山の、その時々の思いを、公私入り乱れて書き留めるものです。御拝読頂ければ幸いです。

【子どもと感覚】

　２５年前から飛騨高山でオーク材を使った家具を作る木工家　稲本正さん（オークビレッジ）のファンですが、最近、その人のコラムを見つけました。それから１部引用します。
　「子どもらしい子どもはどこに？」子どもらしい子どもが減ってきているような気がしてしょうがない。私だけだと思ったら、かなり多くの人が思っているらしい。（略）子どもらしい子どもとは、例えば
　「子どもは　変に知識が豊富でなくていい」
　「子どもは、大人に勝る力がなくていいい」
　「子どもは、とてもとてもあきっぽくていい」
　　しかし
　「子どもは、柔軟な感性を持っていて欲しい」
　「子どもは、柔らかい身体を持っていて欲しい」
　「子どもは、素直に感ずるままに声をあげて欲しい」
　やはり、これが「こどもらしさ」で、変にこましゃくれているのは困る。
　子どもが子どもらしくなくなったのは、視覚と聴覚ばかり刺激して、嗅覚　味覚　触覚への刺激が少なくなり、五感のバランスが壊れ始めたからだと言われている。
　視覚　聴覚は大脳皮質ばかりを刺激し、生きる根本であり、免疫力ややる気、神経バランスを司る大脳辺縁系を刺激する触覚や嗅覚、味覚が少なくなってきている。（略）
　１番良いのは、森や海や、それこそ原生の自然が残り生態系の豊かな場所に連れて行き、**子どもをおもいっきり遊ばせることだ**。特に、春から初夏にかけては、木々の緑が深まり、花が咲き、それこそ「風香る季節」となる。

　私も実に同感です。可愛い子ども、頭をなでてみたい子ども、愛らしい子ども、思わず微笑んでしまうこどものｲﾒｰｼﾞは、「天真爛漫」「ﾒﾙﾍﾝとﾌｧﾝﾀｼﾞｰ」「サンタクロースを一心に信じている」「無垢な無邪気な」「言葉よりもそのしぐさ」などが浮かんできます。
　「知っている子ども」は多いけれど「原体験して身につけている子ども」は多くないような気がします。まさに、テレビやパソコンなどは、視覚と聴覚の代表ですし、大人があれこれ、言葉で説教したり教えたりするのは、聴覚だけですね。
　また、自然の中に連れて行っても、自然観察人のように、あれこれ案内紹介説明したり、意図的に体験させたりするのでなく、時間やマニュアルを忘れて、親子でひたすら遊びほうけるということは、とても大切なことだと思います。

　その意味では、私たち大人は、いかに言葉や映像を少なくして、身体や行動、そしてそのエネルギーと気で示していくかということがとても大切なことだと思います。大人自身が、**身を持って**　示していく、それには　汗と動きと力、そこには、全ての感覚が伴うと思っています。子どもを見守るには、言葉や映像はいらない、それが、大地の基本教育にあります。心からの大人の感じる言葉掛けやお話や絵本も大切な要素です。

　自分の子育ては。こう偉そうに述べている私も、子ども達に失敗して苦労したり恥ずかしいことになって欲しくないという思いから、口うるさくいろいろ言ってきた時代（長男・長女）があります。ただ唯一の救いは、けっして、知識や勉強を教えたり、他人よりも勝るように早期教育や訓練をしたりすることはなかった事です。「人と同じくなくていい家は家のやり方でいい」という頑固なことを押しつけていた事が多かったですが、その分、妻が（祖父母も）とても柔らかく、子ども達に接してくれたので、救われたことでしょう。

　４人の子育て中は、青山家はたぶん旅行でホテルに泊まった事は皆無だったでしょう。良くて青年の家が思い出です。ほとんど、キャンプ、それも、はやりのファミリーキャンプではなく、人のあまりいない山岳キャンプが中心。子どもは思いきり声を出し、自由に動き回り、遊び回る環境は、人が多いところでは、大人も子どもも気を遣い、迷惑をかけます。ストレスが溜まるだけに、子どもを連れて行くには、子どもが子どもらしく過ごせる場所はやはり山岳やマイナーな場所に限られてきます。そして、そこだからこそ、家族の一体感も生まれます。今、振り返ると、テレビやゲームや知識や疑似体験なく、その分様々な自然環境と面白い大人が出入りしている人環境で育ってきたことが、本当に良かったと思っています。その分、まだまだ、子ども時代を楽しみ、素直に感ずるままに声を上げて生きている長男長女。長男は、ﾛﾋﾞﾝｿﾝｸﾙｰｿｰに憧れ、世界放浪の旅へ２年間出発し、長女は、ソロモン、わらの家で修行し、自分の直感のまま人生を描き、心のメンターを沢山得ている。親も羨ましくまぶしく感じる子ども達。一人でも多くの子ども達に、幸あれと願います。（参考　　長男ブログ　**世界放浪の旅　青山雄飛**　検索　日本ブログ村）